

尾形光琳（1658～1716）が伝俵屋宗達筆「槿楓図屏風」（山種美術館蔵）を模写した、「槿楓図屏風」（東京藝術大学大学美術館蔵）の制作について考察する。

江戸中期に活躍した光琳は、桃山・江戸初期の絵師俵屋宗達（生没年未詳）及び俵屋工房の作品を数点模写している。そのなかで、宗達筆「風神雷神図屏風」（建仁寺蔵）を模写した光琳の「風神雷神図屏風」（東京国立博物館蔵）については、2006年に内藤正人氏によって、両作品の輪郭線がほとんど一致したことが発表された。このことによって、従来光琳の模写方法は、作品の傍らで見て写す臨写という方法と考えられていたが、そうではないことが明らかにされ、光琳がトレースしたという見解が出された。それに対して、発表者は、光琳自身がトレースしたのではなく、宗達の下絵か、なんらかの粉本（光琳以外によって写された）を使用して、光琳独自の風神雷神図を制作したのではないかという見解を出した（『美学』236号、美学会編、2010年。『デザイン理論』60号、意匠学会編、2012年）。

本発表では、伝宗達作品と比べると一見違ってみえる光琳の「槿楓図屏風」においても、大方の樹木の幹の形態が伝宗達作品と概ね一致することを明らかにし、従来考えられている臨写ではなく、宗達の下絵か粉本によって制作されていることを指摘する。そして、両図の各樹木を重ね合わせながら、下絵を使用した光琳の制作工程を検証し、その工程を明らかにしたい。また、伝宗達作品と比べるとさらに装飾的で平面的といわれる光琳作品の真相も明示する。さらに、他の光琳作品である「四季草花図巻」（個人蔵）などとも比べ描き方を分析し、制作について考察する。以上の結果から、光琳の「槿楓図屏風」は下絵を用いて光琳の描き方で仕上げた作品であるという新たな見解を出し、結論とする。

但し、最後に、「松島図屏風」（岩崎家旧蔵、焼失）についても同様に宗達作品（フリア美術館蔵）と概ね輪郭線が一致することを提示し、これまで臨写してできたと考えられていたこれらすべての屏風作品の模写工程が臨写ではないこともつけ加え、下絵を使って制作された可能性があることも指摘したい。

琳派という流派名は近代につくられ、宗達と光琳が活躍していた時代には流派として繋がっていなかったわけだが、光琳の模写の仕方が、従来考えられてきた臨写ではないとなれば、実際どのような経緯で図様が引き継がれたのだろうか。本発表では、その経緯についてまで明らかにすることはできないが、そのことについても言及してみたい。